

《宇宙！白色辉光》展

“松本千里的宇宙，从指尖向无限延伸。”

——沓名美和

松本千里初次接触绞染技艺，是在进入广岛市立大学后不久。随着对染织课题的深入研究，她逐渐被这一技法的简练与深邃所吸引。通过捆扎布料，再施以染色，绞染展现出丰富的表现力。从那时起，她便将这一技法融入自己的创作。然而，初次观赏她作品的人，或许不会立刻意识到它们是用绞染技术制成的。

在未经染色的纯白布料上，无数的凸起密集排列。有时，它们仿佛从榻榻米的缝隙间爬出；有时，它们膨胀成庞然大物，主宰着整个空间，散发出宛如巨大生命体般的震撼气息。这并非偶然，松本所着迷的并非绞染技法中的“染色”过程，而是用线将布料扎起而形成的被称为“绞粒”的细小块状布料。在由无数绞粒聚集所形成的有机动态之中，她感受到生命的气息。

绞染的历史在日本可追溯至6或7世纪，最早的实物案例保存于法隆寺与正仓院。而在全球范围内，早在5000年前，印度及其周边地区便已使用绞染装饰衣物，后经丝绸之路传入日本。此外，非洲、秘鲁、中国及中亚等地也存在类似技法，绞染作为一种装点人们生活的技艺在不同文化中不断发展并传承至今。有趣的是，尽管绞染广受欢迎，但在欧洲的传统纺织品中却鲜有类似的技法。这些根植于当地的美丽形状、图案与色彩与西方的审美观念相去甚远，它们在漫长的岁月中形成。这一演变过程，仿佛陈年佳酿在木桶中静静醇化，最终呈现出该地区独有的味道。

在日本有很多著名的绞染产地，包括京都、秋田、大分、新潟等地，而松本选择学习的是爱知县历史悠久的“有松鸣海绞”。与许多日本传统工艺一样，有松鸣海绞采用分工制，由专业工匠分担制作模板、绘制轮廓、布料捆扎和染色等各个工序。过去许多农家妇女将绞染作为家庭副业，虽然她们从小就掌握了这一谋生技能，非常熟练，但她们既非“人间国宝”，也非艺术家，她们经营家族生意、做家务、养育子女、与当地妇女建立社区，同时还要从事大量的体力劳动。

松本将每一个绞粒突起视作独立的生命体，并将它们的集合描述为一个“群体”。从绞染的历史来看，这种感知方式再自然不过，因为那些用线扎制而成的微小布料突起中，埋藏着数千年的记忆和无数国家和地区无名人士的生活印迹。

通过挖掘二维平面纺织品的绞染中的个体与群体之间的普遍关系，进而发展为活用空间的三维表达，松本的作品不仅延续了传统，也是对新艺术表达形式的大胆挑战。

再次凝视她的作品，我们会发现，“扎”这一极其原始的动作，源自人类的生活体验。在极其艰苦和微小的手工过程的反复累积中，艺术家的能量通过指尖被悄悄注入。

通常日本绞染多采用丝绸，而松本刻意选择了高弹性聚酯纤维及光泽感强烈的聚氨酯等合成纤维，使作品呈现出独特丰满的物理形态。

即使是技艺娴熟的匠人，一天最多只能捆绑上几百个绞粒。而松本的作品往往覆盖整个展览空间，并以包围性的力量使观者沉浸其中。她的作品不仅是视觉上的震撼，更是大量手工劳动积累的成果。

随着她双手的移动，思考形状与表达的扩展，布片发生了形状的改变，变得更加凹凸不平，紧贴在柱子和墙面上，并呼应整个空间不断扩大。最终，光芒从内部诞生，蜿蜒扭动交织在一起，好似一个单细胞不断分裂和繁殖寻找新形态的进化过程。

松本的所有作品，无论形状或大小，皆源自最初的一个绞粒，这一点对于理解她的艺术本质至关重要。正如地球上最早的生命体约35亿年前诞生，所有的生命都经历着并代代相传交织在一起的故事。

一旦意识到这一点，我们会发现，每一个绞粒犹如宇宙中构成星系的小小星辰。正如浩瀚宇宙中的某个角落诞生的星星一样，松本掌心中的白色星星也在静静脉动着，使原本洁白的布料化作孕育新生命的载体。通过她的作品，我们得以发现，一块源于日常生活的布料竟能与宇宙的基本能量深刻相连。

松本千里的艺术虽然源自日本传统的绞染技法，但她所创造的每一个绞粒都是一个生命，你可以感受到人群中巨大能量的反复收缩和爆发。就好像它有自己的生命，承载着地球的记忆。

「宇宙は白く瞬く」展

「松本千里の宇宙は、指先から無限へと広がっていく」——沓名美和

松本千里が絞り染めと出会ったのは広島市立大学に入学してすぐの頃だという。染織に関する課題を紐解くうちに、布を糸で絞り染色する絞り染めのシンプルで奥深い技法や表現の豊かさに魅了されていったといいます。以来、彼女は絞り染めを自身の作品に取り入れてきましたが、初めてその作品を目にした者は、それが絞り染めの技法によるものだとは気づかないかもしれません。

染められることのない、真っ白なままの布に無数の凹凸が密集し、時には畳の隙間から這い出るように、時には巨大な突起物となって空間を支配していくその様相は、まるで一つの巨大な生命体のような迫力を備えています。それもそのはずで、松本が惹かれたのは、絞り染めの「染め」の部分ではなく、布を糸で括ることで生まれる「絞り粒」と呼ばれる小さな布の塊だったのですから。その形状、そして絞り粒が無数に集まることで生じる有機的なダイナミズムに、彼女は生命(いのち)の気配を感じ取っているのです。

絞り染めの起源を遡れば、日本では6~7世紀に始まり、最も古い例は法隆寺や正倉院に遺されています。一方、世界に目を向けると、インド周辺では約5000年前には絞り染めが衣服の装飾に用いられていたとされ、その技術がシルクロードを経て日本にもたらされたことが想像できます。さらに、アフリカ、ペルー、中国、中央アジアなど、世界各地に同様の技法が存在し、絞り染めが人々の生活を彩る技術として発展しながら、現在まで継承されてきたことがわかります。ユニークなことに、これほど広範囲に伝播していった絞り染めですが、ヨーロッパの伝統的なテキスタイルのなかではほとんど類似のものが見られません。西洋の美意識とは離れたところで、その土地に根差した美しい形や模様や色彩が、長い年月の中で形成されていったといえるでしょう。まるで樽の中で熟成された蒸留酒が、その土地独特の味わいをもつかのように。

日本国内にも、京都、秋田、大分、新潟など全国各地に絞り染めの産地がありますが、松本はそのなかでも特に歴史ある愛知の「有松鳴海絞り」を学びました。有松鳴海絞りは、日本の伝統工芸に多く見られるように分業制で作られ、型紙作り、下絵描き、布の絞り、染色といった工程ごとに専門の職人が作業を分担しています。かつては農家の女性たちが内職として絞りの作業を行うことも多かったのだそうです。幼いころから生活の糧に身に着けてきた彼女たちの技が高度に優れたものである一方で、彼女たちは人間国宝でもアーティストでもありません。家業をし、家事をし、子どもを育て、地域の女性たちとコミュニティを持ち、そうした暮らしの中で、途方もない手業を成しているのです。

松本千里は絞り粒のひとつひとつを命あるもののように語り、その集合体を「群衆」と表現しますが、絞り染めの歴史を振り返ればその感覚は至極当然のもので、まっさらな布を糸で括ることで誕生する、あの小さな布の粒には、数千年という遥かな時間と無数の国と地域の名もなき人々の暮らしの記憶が潜んでいるのですから。

平面的なテキスタイルとしての絞り染めのなかに個と群衆という普遍的な関係性を見出し、さらに空間を活かした三次元的な表現へと発展させることで、松本の作品は単なる伝統の継承にとどまらず、新たな芸術表現への果敢な挑戦といえることができるでしょう。

もう一度、彼女の作品をじっくりと眺めてみましょう。

人間の暮らしのなかで生まれた「絞る」という極めてプリミティブな行為。その気の遠くなるような小さな作業の積み重ねによって生まれる突起の一つひとつには、作り手のエネルギーが指先を通じて静かに満ちているようです。

通常、日本の絞り染めには絹が用いられますが、松本はあえて伸縮性の高いポリエステルや光沢のあるウレタンといった化学繊維を使用することで、肉体性を帯びた独特のむっちりとした、ふくよかな造形を生み出しています。

熟練の職人でも一日に括ることができる絞り粒は数百個といわれていることを考えれば、広い展示空間を覆い尽くし、観る者を包み込むような迫力を持つ松本の作品が、いかに膨大な手作業の集積であるかが理解できるでしょう。

手を動かしながら形や表現の広がりを思考する彼女によって、一枚の布は形を変え、凹凸を増やし、柱や壁面に纏わりつき、空間全体と呼应しながら広がっていきます。やがて内部に光を宿し、動きを与えられ、ねっとりとした姿は、一個の細胞が分裂と増殖を繰り返しながら新たな姿を模索していく進化の過程のように思われるのです。

形状も大きさも異なる松本の作品のそのすべてが、たった一つの絞りから始まっていることは彼女の芸術性を理解する重要なポイントといえるでしょう。それはまさに、地球ではじめての生命体が誕生したとされる約35億年前から、命ある全てのものが経験し、連綿と紡がれてきた物語そのものです。

そのことに気づくと、絞りの一つ一つは、まるで宇宙に銀河を形成する小さな星々のように感じられてくるのです。広大な宇宙のどこかで星が誕生するように、松本の掌の中で生まれた白い星たちが、静かに脈動し、真っ白な布は新たな生命を包み込むものへと変容していく。作品を通じて私たちは、日常のなかから生まれた一枚の布が、宇宙の根源的なエネルギーと深く結びついていることを発見するでしょう。

松本千里の作品は、日本の伝統的な絞りの技法から始まっていますが、彼女の生み出す絞りの一つ一つは生命であり、群衆の大きなエネルギーの収縮と破裂の繰り返しを感じます。まるでそれ自身が命を宿し、地球の記憶を宿しているかのように。